



NPO/
SORUCA
NonProfit Organization/Soft Resources of Urban and Country Association

通信

2016
初春

会員 各位殿

NPOソフトインダストリー研究会

巻頭言

理事長 白石 嘉宏

過ぎたるは及ばざるが如し

原油価格は見る間に100ドル台から30ドル台へと下落した。

原油の余剰は2%に満たないと言う。有り余って処分しないと困るのならともかく。安倍政権総がかりで5頭のクジラ(象とも言う)、年金積立金、公務員が加入している共済年金、郵貯銀行とかんぽ生命保険、さらに日銀も動員。実態と乖離させてまで株価を2万円近くまで押し上げた。しかしこれは最近の株価を見ての通り。さらに黒田日銀は3回目の矢としてマイナス金利を実施。結果はさらに惨憺たる姿となってしまった。金融機関はベースアップ見送りを決定。

原油への投機にしても、株式への投機にしても、お金ジャブジャブにしても効果が上がるどころか事態は益々悪化。投機家も政府も日銀も皆さん秀才の集まりなのでしょう。でも、今年の始めからの推移を見れば頭で考える経済はもう限界を超えていると我々庶民は見ています。物々交換、そうして重さで計る貨幣、その後金本位制の経済、それが1971年に終わり、後は「信用」という架空の「想い」を担保にしてお金を印刷するようになった。その行き着いた姿が今日の世界です。ジャブジャブのお金は一部の人の手に集まり、これが、人件費が安く若い人が多い国に投機された。このお金は少しでも「利」があると思えばそこにドッと流れる。別のところでもっと有利な利回りが期待されれば今まで投機したところの資金を引き剥がし次に向かう。経済の弱い国と労働者は持ち上げられたかと思うと次は奈落の底に落とされる。人の生活を大切にすることよりも実体の伴わない経済というゲームの結果である。トリクルダウン効果って? 誰か恩恵にあずかった? 先ずは人が暮らせるようにすることに注力して欲しい。

紙幣を食べることの出来るのはヤギだけ。皆がご飯を食べられるように。

SORUCA 通信 contents

- 過ぎたるは及ばざるが如し
- コミュニケーション環境の変化
- 高齢化とお葬式
- 世界人口
- 「港区赤坂」の魅力
- 「見たこと、したこと」白石回想録-5



コミュニケーション環境の変化

先月の末になるが出版化学研究所が15年版の書籍と雑誌の売り上げを公表した。電車では座席に座っている人のほとんどがスマホを操作している。私はそこまで落ち込むとは思っていなかったが1兆5220億円と過去最大の減少となっていた。減少幅は5,3%である。

会話、電話、手紙などによる人と人とのコミュニケーション、放送・出版というマスに対しての情報提供。其の中に今度は会話もメールもマスに対する情報提供も全てを包含するインターネットが登場した。

どの分野がどれくらいこのインターネットに取って変わられるかと思っていたのだが雑誌と書籍がその影響を最初に最も受けたのだろう。

人が一日に持つ時間は誰でも24時間、情報を受け取る器官は目と耳（鼻での香り、口での味わい、肌でのふれあいもあるが）である。世代的には年長者は人との直接的なコミュニケーションが今も主流だ。テレビがすぐに取材に行く新橋駅前広場、そこでは飲み屋で酒を前に楽しく話し合に行く、行ってきた人が映し出される。新聞も駅の売店で売っている。

一方若い人達は新橋の駅前ではあまり見かけない。彼らは自宅でも車中でも仕事先でもいつでも仲間と情報交換しているし、ゲームや電子出版、さらにニュースや映画もネットを介して接している。書籍だけでなくこれからは新聞、ラジオ、テレビ、そうして人と人とのコミュニケーションも変わってゆくのだろう。現実

に私の知る限り新聞をテレビを積極的に読む、観る若者を知らない。彼らは情報提供者に自分の時間を合わせるのではなく自分が求める時に求める情報だけを選んで視聴する。すでに録音録画のように情報をストックするという

こともしない。情報は各社によりストックされているからそこから取り出す。インバウンドの伸びが予想以上との報道がされているが、訪日外国人たちも今までのように旅行会社がセットしたツアーコースに乗るのではなく、スマホ片手に来日前に自分が興味を持つところへと向かってゆく姿が見られる。

世代間のメディア選択の変化はこれからインターネット世代が増えるに従いコミュニケーションの主流がインターネットへとシフトが進み、其のことは人が出会う場所、過ごす時間、消費の内容が変わってゆくことにつながってゆく。

今度の選挙から18歳以上の人達が投票権を持つ、果たして彼らは選挙に興味を持つのだろうか、興味を持った時にどんな情報交換を行うのだろうか、そうして投票に行くのだろうか。もし、選挙に影響が出るならこの国の姿はかなり変わるだろう。マスが送り出す情報と彼らの交わす情報との差が楽しみである。

国の許認可、広告主に気を使い無難な情報を流すメディアは売り上げを減らしてゆくだろう。情報は時の政権が弄繰り回すものから皆のも手の内のものになる。本当の民主主義の基盤になってゆくならすばらしいことだ。

高齢化とお葬式

昨年敬老の日を前に厚生労働省は100歳以上の高齢者が6万1500人になったと公表した。1963年の調査開始以来始めて6万人を超えたとのことである。最高齢者は女性で115歳、男性の最高齢は113歳。100歳以上の人の87%が女性で男性は僅か7840人。人口10万人当たりになると全国平均では48,45人だが島根県では90,67人続いて高知、鹿児島。一方最も長寿者が少ないのは埼玉県で28,6人、続いて愛知、千葉です。このことは地方は高齢者が多く若者が少ない、逆に首都圏とか中京圏のように働く青壮年が多いところは人口比になると長寿者が相対的に少なくなるからです。

さて、生まれたからには誰でも何時かは必ずあの世に旅立つのですが、高齢者が増えるということはお葬式の世界にも変化をもたらします。樹木葬、散骨などが話題になりましたが私の家の近くのお寺では宗派を問わず誰でも受け入れることを表明するところも出てきました。一方地方では檀家が少なくなり廃寺に至るところも出てきています。

昨年当会のセミナーでは生前葬をテーマにしました。生きていて元気なうちに多くの友人が居るうちに賑やかに楽しくパーティ感覚でやろう、やるようになるのではないかとのお思いからです。

高齢化する、長寿であるということはお目出度いこととされていますが、五体満足で健常で5つの縁、血縁、地縁、学校縁、会社縁、趣味縁に満たされているという条件が整わないと幸せであるとは言いきれません。ほとんどの人は5つの縁のうち多くの縁が希薄になります。生前多くの部下、取引先、友人を持っていた人も会社を辞めて10年もすると僅かな友人の他は付き合いが無くなります。通夜はともかく告別式になると家族と僅かな人が見送るだけになります。当然お葬式もそれに合わせるようになります。

時代はインターネットへ移行中。此処で登場するのがご存知アマゾンです。先ず、亡くなった人の自宅という移動なし、戒名なし、僧侶を派遣して読経・法要法事だけなら35,000円で済みます。移動ありはプラス1万円、戒名ありはプラス25,000円と破格のお値段。「お坊さん便」とネットで検索すればすぐにお葬式1日コース6万円、通夜からはじめると10万円のコースが出てきます。もちろんこれを黙って見てもらえないのが宗教法人です。59の宗派が加盟する全日本仏教会では宗教行事をサービス産業にしていると言う抗議を行い、特にお布施の料金制には反対を唱えています。

宗教かサービス産業か。地域血縁に根ざしたコミュニティなのか生活情報として誰でもがどのような環境・状況にあっても受けられるものか。皆さんはどう思われますか。でも、もっと先に進むと読経も戒名も何も要らないと言う宣言を生前に行う人が出てくるかも知れません。

核家族化が進み一人世帯が増え、長寿化が進みインターネットが最初の問い合わせ先になると人生の終焉も今まで通りとは行かないでしょう。

元気なうちに楽しく明るくみんなが集まる賑やかな生前葬をもう一度考えてみませんか。

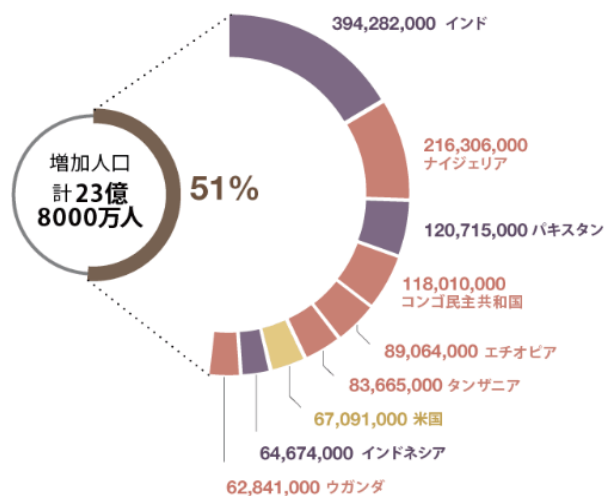
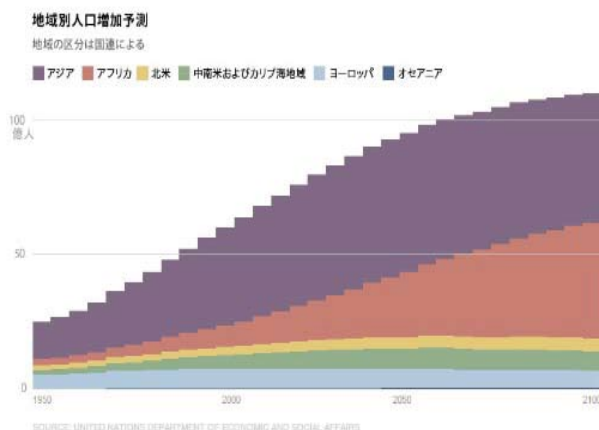
世界人口

<http://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/080600214/>

国連が世界人口の推計を発表しました。私たちの国、日本は人口減少に向かっていますが世界人口は増え続けます。昨年の推計人口は 73 億人ですが 2050 年には 97 億人に達しさらに 2100 年の世界人口は 112 億人と予測しています。

人口が増えるのは図の通りアジアとアフリカです。インドなどは今よりさらに 4 億人近く増えます。アフリカのナイジェリアも 2 億以上。日本は皆さんご存知の通り現在 11 位ですが 2100 年には 8,300 万人になり順位は 30 位まで下がります。人口が増えるところは当然若者が多いからです、ですから今の人口が多いほどモノの需要が多く経済が活発になるとする思考を続けるならアジアとアフリカは西欧の経済を凌駕し世界の経済の中心へと進むでしょう。また、此処で注目しなければならないのは人口増加とは出生率が高いからということから寿命が伸びることに拠る要因が大きいということです。世界全体の平均寿命が現在の 70 歳から 2100 年には 83 歳を超えるとしています。2100 年には高齢者が現在の 3 倍に、一方出生率は 1,99 人に低下する。だから、この時人類が最も多くなるがその後は緩やかに減少に向かってゆくとの予測。

ですが、今でも人口は多すぎませんか、人口が多いから経済発展なら逆に人口が少ないところは自然が豊かになります。お金が多い方が幸せか、花と緑に囲まれた方が幸せか。ちなみに葬式の時は花を飾り、棺桶の中は花だらけ花で埋め尽くします。天国は人混みではない。人口が増え続ければ続くほど豊かな空間の価値が上がると私は思っています。金持ちは自然豊かなリゾートが大好きです。



天からの封書

アメリカの大統領選の予備選挙の途中結果を見ていると、壊れていくアメリカを見るようである。金融資本主義が最後の断末魔の様相であり、既存の利権構造が崩壊しようとしている。そこには戦勝国アメリカの姿はなくなっている。

18世紀中頃からヨーロッパに生まれた近代文明は、産業革命にはじまり、250年経っている。科学技術の発展では原発、遺伝子組み換え、人工知能にまできている。政治の分野では帝国主義、植民地支配の時代から、第二次世界大戦後の東西冷戦、そしてその崩壊後のリベラル民主主義による市場経済の拡大は今やテロリズムを生んでいる。経済の分野ではポスト資本主義が見つからないまま、株主優先、グローバリズム、金融資本主義のバーチャルな世界の肥大化が進んでいる。

時代はいま大転換しようとしている。そして変化のスピードはますます速くなっている。では何が転換しようとしているのでしょうか。P.F. ドラッカーは「ネクスト・ソサエティ」の中で、「未来は予測しがたい方向に変化する」と言っている。

アメリカの金融資本主義が破綻し、中国の経済危機が表面化し、ロシア・EUの経済基盤がさらに弱体化するであろうと予測されている世界経済にあって、唯一期待できるのが日本だけである。しかし首都圏直下型地震がいつ起きるかわかりません。東京オリンピックが開催できない可能性だってあります。

戦後70年、アメリカの占領政策により、我が国の外交も防衛も教育も家庭も経済を除いては、すべて伝統を放棄し弱体化させられました。しかし東日本大震災の際、被災者がほかの人に対して行った思いやりの姿に、多くの海外の人々から日本人に対する尊敬の思いがありました。尊敬される日本人と言われ逆に自信を取り戻しつつあるのだと思う。

人は天からの封書を預かって、この世に生まれてくる。森信三の言葉です。人には使命があるのです。しかし、死ぬまで封書を開かなかった人。封書に気付かなかった人は多いのです。

国にも役割があると思います。アインシュタインが日本を離れるとき、日本の国土の美しさ、日本人の道德心の高さをたたえ、「神がこの国を地球に残してくれたことに感謝します」と言ったという。日本の役割は好むと好まざるとにかかわらず、世界情勢の変化にともない増大してゆきます。

資本主義に代わる新しい経済原理、株主優先の企業方針に代わる新しい経営理念等が求められています。日本には縄文時代から連綿と受け継がれてきた国柄があります。素直にそれを経済原理や企業理念に生かせばよいのです。それを可能にするのは、一人ひとりが天からの封書を自覚し、生きぬく力を養うことであると思います。(渡辺 勝範)

「港区赤坂」の魅力

2014年12月東京商工リサーチ調「社長が多く住む街」ランキングで1位の「港区赤坂」の魅力をさらにおってみましょう。

明治以降、軍人や政財界人の利用で料亭や待合として発展した赤坂の花柳界には、昭和5年ごろ、芸妓屋140軒、芸妓408名もいたと言われていました。黒塀の街に黒塗りの外車が並び、その間を、芸者さんを乗せた人力車が行き交う風情漂う町でした。昭和20年の空襲は赤坂のすべてを焼き尽くしましたが、戦後復興が始まると国会や霞が関に近い赤坂の花柳界は息を吹き返し、外堀通り沿いの自動車ディーラーや関連の会社は活気を呈し、昭和30年赤坂に移転した東京放送（TBS）は33年から本格的なテレビ放送を始めました。

また、30年代には赤坂プリンスホテル、ホテルニュージャパン、ホテルオークラ、ニューオータニホテル、ヒルトンホテルなど日本の先駆けとなったシティーホテルが建ち並び、多くの外国客を迎えました。

花柳界は料亭「中川」、「川崎」「千代新」などを中心に政財界の面々や映画スターたちで賑わい、次々とオープンしたナイトクラブ「コパ・カバーナ」、「ラテンクォーター」、レストランシアター「ミカド」、キャバレー「月世界」、ディスコ「MUGEN」、バー、クラブなどでは外国のバイヤーと商談をするビジネスマン、政財界の面々、TBSに集まる映画スターや芸能人などが加わり、昭和30年代、40年代、50年代、赤坂は明けることを知らない夜の街でした。

その後バブル崩壊によって華やかなイメージがやや遠のいていましたが、2007年3月には、防衛庁跡地にホテル・オフィスビル・住宅・商業施設等からなる“東京ミッドタウン”が開業しました。TBS放送センターとその周辺の再開発計画により誕生したエンターテインメントスポット「赤坂サカス」。ライブハウス「赤坂BLITZ」や劇場「赤坂ACTシアター」が並び、「Sacas 広場」では季節ごとに多くのイベントが行われます。春になれば約100本の桜が彩りを添えます。「赤坂Bizタワー」の4階から38階は共用部、専有部共に、機能性・快適性に富んだオフィスが展開され、地下1階～地上2階はショッピクス&ダイニングとなっており、オフィスサポート機能に重点をおいた飲食・物販を中心に、赤坂に相応しい高感度で洗練されたショッピクスが軒を並べています。

このように平日はオフィス機能、オフの日には様々なイベントが催されるエンターテインメント機能をもった複合商業施設の近隣に居住する社長が増えてくるというのは、ある意味当然かもしれません。パソコン、スマートフォンさらにはウェアラブル端末へと進化していくデバイスに幼い頃から慣れ親しんでいるファーストレスポンス重視の世代にとって、郊外に一戸建ての城を持ち、通勤時間をかけてオフィスに出社する時間は無駄であるという意識が強いのですし、休日に混雑した道路状況の中、わざわざ遠くに車でかけて余暇の楽しみを求める必要もありません。人口の観点からみても、港区の住民基本台帳人口は、平成17年に比べ、東京都の人口が6.3%の増加率を示しているのに対し、27.2%も増加しています。港区の年齢三区分別の人口においても、年少人口（0歳～14歳）、生産年齢人口（15歳～64歳）及び老年人口（65歳以上）のいずれも増加していて、特に年少人口の増加が顕著です。港区の将来人口は、平成33年1月1日時点で約27万人となる見通しです。赤坂地区の人口も平成27年1月1日現在35,611人が、平成33年1月1日には40,646人となり、14%増加すると想定されています。

一方でとどまることのない発展と変貌は、騒音や放置自転車といった住環境の悪化やコミュニティの希薄化といった都心特有の課題にも直面しており、行政も港区基本計画 赤坂地区版計画書において「未来に向け共存できるまち赤坂・青山～魅力あふれる国際都市へ～」として、めざすべき将来像を掲げて取り組んでいくことを標榜しています。

こうしてみると人気がある「街」というものは、前提として歴史・伝統・文化がある「まち」であり、それが時代とともに上手に進化して、魅力ある「街」になっていったということがよくわかります。これから将来さらに魅力ある「街」をつくっていくためには、私たち自身が、日本の歴史・伝統・文化をより深く知ることが、とても大切なコトなのではないでしょうか。まずは堅苦しく考えず、そういうことを頭の隅におきながら街をのんびり歩いてみて下さい。きっと興味深いコトが発見できるはずですから。

2016年2月吉日 リプロパティ・ディベロップメント株式会社 野村

「見たこと、したこと」白石回想録—5

高校入学が許されなくなるとは困るので勉強嫌いの私もやむを得ず中学3年になると勉強をしました。それでようやく高校に滑り込みました。ところが高校は1年生の成績で2年生からは理系コースと文系コースに分けられる制度になっていました。理系は他の大学を受験する希望の人にその望みがかなえられるようにカリキュラムが組まれています。ですからなんとなくこっちの方が格好良く見えます。文系はゆったりしたカリキュラムですから教養を養うには適しています。私は理系を選びました。授業の進むペースは速く、教室の座席は成績順です。親が見に来れば何処に座っているか一目瞭然。3年生になると大学に進み希望の学部に入れるかどうかは本人の成績と実力試験といわれる学校で習っていないことも含めた問題に答える試験が3回あります。この結果は廊下に一番からビリまで番号順に名前が並びます。今の学校では生徒の成績を晒し者にするということで許されないでしょう。

私は最後の実力試験でようやく24番まで進むことが出来ました。数学と物理は手を抜くとすぐに順位が落ちます。また、理系を選ぶと大学では実験が続き休むことが出来なくなると聞かされ躊躇なく経済学部を選びました。

中学では親の勧めで始めはテニス部に入りましたが、新入りの1年生は毎日グラウンド整備と球拾いです。6月暑い中、友人が水泳部に入らないかと誘いに来ました。戸山の中学から目白まで歩いて通うのですがそこでは高校生・大学生と一緒に練習です。高校・大学にまぎれて帰りには団子を食べたりなど買い食いも出来ました。私は平泳ぎを選びました。当時は潜水泳法といって、一度スタート（飛び込む）したら中学生でもほぼ50メートルは潜ったままです。千駄ヶ谷の神宮外苑の東京都のプールでの大会で私はこのスポーツは体力的にとっても上位は望めないとわかりました。結果、趣味と健康、体位向上に目標を切り替えました。高校では友人が「人をたたくと褒められるスポーツがある」と誘われました。聞いてみたら剣道でした。私の家には刀剣が40振りほどあり、母も剣道をやってはどうかと以前あら言っていたので剣道部に入りました。剣道部では最初の仕事（稽古ではなく）が道場の復旧と部室作りです。戦後GHQにより剣道は禁止されていました。剣道場は乃木大将が学習院院長になった時に造られた由緒ある建物でしたが、ここが卓球場などとして使われ床の上には土がこびりついていました。これを剥がし洗い、豆腐のオカラを詰めた袋で床を磨くのです。部室は大学生が器用に整備しました。薄縁と絨毯の古いのを敷き詰めたので畳敷きには及びませんが結構快適な部屋になりました。此処では大学生に混じってお酒のご相伴に預かることが出来ました。学校の中で部室が一番居心地の良い場所に成りました。次は当時の東京の風景を書きます。

編集後記

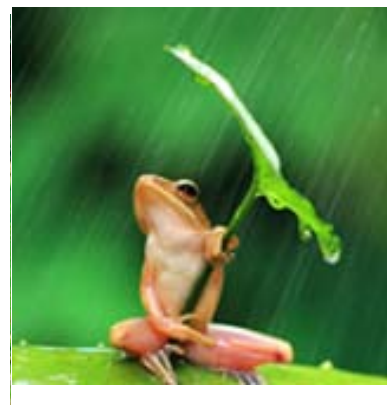
やっと確定申告が終わった。95歳の母と90歳の義父と小生の3軒分である。高齢化の見本のようなのだが、こんな税の徴収方法ではこれから先、年寄りには複雑でついていけない。シンプルなのがベストである。年寄りのわずらわしさをなくすための税制改正こそ損得で生きることへの警告になると思う。(渡辺)

SORUCA のホームページの画面です。 <http://sorca.p2.weblife.me/>



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」 広報誌 SORUCA 通信 (2016年初春号)

発行責任者 白石 嘉宏
発行所 NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
TEL: 03-3266-1769
FAX: 03-3266-1764
<http://sorca.p2.weblife.me/>
編集人 渡辺 勝範・長谷川 毅
発行日 2016年3月18日



発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会